

## 戦争から考える

鹿児島玉龍中学校 二年 新村 美夢

私の誕生日は八月十五日だ。第二次世界大戦の終戦記念日だ。

この日に日本は戦争に終わりを告げた。その終戦の日も今年で七十回目を迎えた。私の父も母も戦争のことは当然知らない。大正を生きだ祖母からは戦争の話を聞くこともなかった。その祖母も最近、九十六才という命で亡くなってしまったので私の周りには戦争について直接知っている人がいなくなってしまった。

私たちは普段から平和がどういうものかを考えているだろうか？

毎日家族と話せることがあたり前、勉強できることがあたり前だと私たちは思ってしまった。そんな世の中の人たちに戦争という二文字を突きつけても、知らないの一言ですまされてしまう。

だから、毎年八月になると、ニュースやテレビ番組で戦争のことが放送される。これは戦争について知らない世代の私たちに少しでも、戦争の悲惨さ、そして平和について考えてほしい、知ってもらいたいと願いを込め放送されているものだ。

この前、テレビを見てみると、「八月六日、九日は何の日ですか。」という街頭インタビューがあった。それを見ると、考えこむ人が多く、広島と長崎の原爆投下の日のことを知らない人が多いということに唖然とした。中高生、大学生も多かったがその中で、五十代や六十代の中高年の人たちが分からないと答えたのはとても驚いた。その日を思い、悲しむ人がいる裏で、何も知らずに過ごしている人がいるということに改めて気づかされた瞬間だった。

それなのにこの先、戦争を体験した人がいなくなってしまうたら、この戦争について語り継いでいくのは戦争について何も経験していない私たち自身だ。今、私たちが学ばなければ当然、後の世代にも

伝わらないのだ。今を生きる私が学んでいかなければならないのだ。大正五年生まれの私の祖父は二十代の頃にシベリアに抑留されていたという。母からこの話を聞く前は「シベリア抑留」という言葉さえも知らなかった。これは日本軍がソ連により、シベリアに移送隔離され、長期にわたって労働生活をさせられたものだ。

それによって、多くの方が飢えや寒さで亡くなったそう。祖父は調理担当だったため、屋内で作業できたこと、そして味見などをして飢えを防いだことによって、生き延びることができた。聞いた。また、父方の祖父は長崎の佐世保の海軍で準備をしていたときに終戦だったため、生きて帰れた。祖父を待つ方の祖母も、たばこ等を配給していたため、ひもじい思いをしなくて済んだと聞いた。しかし、空襲により焼け野原になった所も見ていたそう。

みな、強く生きてきた。そんな、生きることには精一杯だった昔の方たちが今の私たちの姿を見たらなんというだろうか。

家族と話せることがあたり前、勉強できることがあたり前。あたり前だと思っていることはあたり前でなく、今の私たちは先祖の方がいたから生きている。戦争によって、祖父と祖母が亡くなっていったら、今ここに父も母も、そして私もいない。先祖の方が授けてくださったこの命を私たち一人一人が大切にしていきたい。

昔の方が命をかけて築いてくださった平和を私たちが守り続け、自分の子孫に受け継いでいきたい。

天皇陛下が全国戦没者追悼式で述べられた「世界の平和とわが国の一層の発展を祈ります。」というお言葉通り、世界の人々が笑顔で安心して生活できる世の中を願いたい。